慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴィクトル・ユゴーと雷の詩学
Sub Title	Victor Hugo et la poétique de la foudre
Author	小潟, 昭夫(Ogata Akio)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.38 (2004. 3) ,p.11- 45
JaLC DOI	
Abstract	2003年3月2日（日）に山形県鶴岡市慶応義塾大学鶴岡タウンキャンパスで「雷サミットII」が開催され、そのときに「ヴィクトル・ユゴーと雷の詩学」という題で発表しました。それを基にしてその後の研究成果を踏まえて本論を作成しました。フランス語でfoudre（雷）が(1)雷、雷電 (2)威力、激怒、制裁、懲罰を、特にcoup de foudre一目惚れを、残lair（稲妻）が、(1)稲妻、電光、(2)閃光 (3)輝き (4)瞬間的なひらめき、天啓 (5)エクレアを、 tonnerre（雷鳴）が(1)雷鳴、轟音 (2)雷のような (3)雷霆（らいてい） (4)雷鳴器を意味しております。foudreは雷の総称を指し、 残lairが光を、 tonnerreが音を指し示していることは明らかですが、もともとギリシア神話やラテン文学にそれらの淵源があると思われます。ギリシア神話において、ゼウス（ユーピテル）は気象学的現象、特に雨、あられ、雪、雷など天候の神でした。雷はゼウスが常に用いた武器でした。宇宙のあらゆる出来事は、ゼウスの管轄下にあると言っても過言でありません。ゼウスは前兆を与える者とみなされ、雷や電光もまた前兆とみなされていました。ゼウスは翼のある槍の形をした雷を携えていました。プロメテウスは自分の創造物を慰めるために、神々から火を盗み人間に与えました。ゼウスは、プロメテウスをオケアノス川のほとり近くにある高い岩につなぎ、毎日鷲にプロメテウスの肝臓を食べさせることで、彼を罰していた。こうした神話が、ヨーロッパの文学作品における参照の役割を演じていたことは想像に難くありません。もう少し詳しく検討してみますと、ギリシア・ラテン文学だけでなく、旧約聖書や新約聖書が、ヨーロッパの文学における雷のイメージ形成に大きく寄与していることが理解されます。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20040330-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴィクトル・ユゴーと雷の詩学

小潟昭夫

2003年3月2日（日）に山形県鶴岡市慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスで「雷サミットII」（主催･鶴岡市）が開催され､そのときに「ヴィクトル･ユゴーと雷の詩学」という題で発表しました。それを基にしてその後の研究成果を踏まえて本論を作成しました。

フランス語でfoudre（雷）が①雷、雷電　②威力、激怒、制裁、懲罰を、特にcoup de foudreが一目惚れを、éclair（稲妻）が、①稲妻、電光、②閃光③輝き　④瞬間的なひらめき、天啓　⑤エクレアを、 tonnerre（雷鳴）が①雷鳴、轟音　②大音響　③雷霆（らいてい）　④雷鳴器を意味しております。foudreは雷の総称を指し、éclairが光を、tonnerreが音を指し示していることは明らかですが、もともとギリシア神話やラテン文学にそれらの淵源があると思われます。

ギリシア神話において、ゼウス（ユーピテル）は気象学的現象、特に雨、あられ、雪、雷など天候の神でした。雷はゼウスが常に用いた武器でした。宇宙のあらゆる出来事は、ゼウスの管轄下にあると言っても過言でありません。ゼウスは前兆を与える者とみなされ、雷や電光もまた前兆とみなされていました。ゼウスは翼のある槍の形をした雷を携えていました。プロメテウスは自分の創造物を慰めるために、神々から火を盗み人間に与えましたが、ゼウスは､プロメテウスをオケアノス川のほとり近くにある高い岩につなぎ、毎日鷲にプロメテウスの肝臓を食べさせることで、彼を罰していたのです。こうした神話が、ヨーロッパの文学作品における参照の役割を演じていたこ

とは想像に難くありません。

もう少し詳しく検討してみますと、ギリシア・ラテン文学だけでなく、旧約聖書や新約聖書が、ヨーロッパの文学における雷のイメージ形成に大きく寄与していることが理解されます。

1．西欧文明における雷のイメージ

西欧文明の文脈で雷がギリシア神話の重要な要素であることは、上述しましたように、ゼウス（ユーピテル）が天空を司る神であり、彼の武器が雷であることから窺うことができます。雷の表象である雷霆は、ジグザグにたくさんの矢が出てくる一種の紡錘体でありました。時には矢、時には三叉熊手でありました。ヴェルギリウスは、三つの雹、三つの雨、三つの火、三つの風である 12 の光線を投ずる、燃え盛る矢を記述しています。雷が表象する、物理的精神的な嵐のあらゆる形態と調子が問題です。雷は、至高の神の意思と全能を表示しています。両極的な雷は、神性の創造的力と同時に破壊的な力を象徴しています。雷は天上の神の武器で、あらゆる神話において、神が雷を叩きつける場所は神聖で、したがって神に雷を打たれた人間は聖別されるというわけです。

キュクロプス（一眼巨人）族が火のなかで鍛造したゼウスの武器に他ならない稲妻は、直観的で精神的な解明あるいは突然の啓示の象徴です。しかし、稲妻は、精神を啓示し刺激を与えると同時に、タイタン（巨人）族が表象する、満たされぬ欲望の激しさを打ちのめします。啓示すると同時に雷で打つという両義的な象徴なのです。

ギリシアの伝統では、雷鳴はまず地底のとどろきに関係していました。おそらくそれは天地創造の起源における地震のおぼろげな記憶であったにちがいありません。しかし雷鳴は地中から天の神ゼウスの手中に移りましたが、そのとき、ゼウスは父クロノスの手足を切断し、兄弟たちを解放したのです。ヘシオドスによれば、兄弟たちはゼウスの善行に感謝するのを忘れませんで

した。彼らはゼウスに雷鳴と煙のでる雷と稲妻を与えたのです。

他方、聖書の伝統によれば、雷鳴はヤハウエ（エホバ）の声であり、神の顕現の告知でもあります。イスラエルと同盟を結び、モーセに十戒をゆだねる前に、エホバは天空と地上に大きな音を響かせました。「翌々日、夜明けに、山上に、雷鳴と稲妻と厚い雨雲が臨み、強烈なラッパの音が鳴り響いた。野営の人民はみな震えた。モーセは、神と出会うように、人民を野営の外に導き、人民は山のふもとに立った。シナイ山は、煙を発していた。というのはエホバが火の形でそこに降りていたからである。煙がそこからまるでかまどからのように立ち昇っていた。山全体が激しく揺れていた。ラッパの音が次第に高まりつつあった。モーセが語りかけると、神は彼に雷鳴で応えていた。エホバはシナイ山の頂上に降り、モーセを山の頂上に呼び寄せた。そしてモーセは登った。」（出エジプト記 19，16 － 20） 雷鳴はエホバの力強さ、特にその裁きと怒りを表明しています。雷鳴は消滅への神の威嚇を表象していました。

「雨雲の広がりや、テントを脅かす雷鳴を
誰が理解するのだろうか？
神はその上に光を放ち、
山々の頂を覆い、
両手に神は稲妻の光をまとい、
的に狙いを定め、
神の雷鳴は思いを告げる、
悪に対する怒りを。」

（「ヨブ記」36，29 － 33）

「かの顔の輝きを前にして、雨雲は遠ざかった。－雹や火の束を投げながら。天からエホバは雷鳴を轟かせていた。至高の神はその声を響かせていた。－雹や火の束を投げながら。主は矢を射ていた。あらゆる方向から投じながら。

次々に稲妻を投じていた。」(「詩編」18、13-15)

稲妻は、生命の煌きと肥沃な力を象徴しています。それは大きな力とすごい速さを持つ天の火であります。稲妻は、有益でありますし、有害でもあります。稲妻は射精に譬えられ、天地創造における神の男性的な行為を象徴しています。同じ意味において、「詩編」(29, 3)は若い牝牛を分娩させる神の声について語っています。神が話しかけるとき、神は雷鳴の音と稲妻の光に取り囲まれています。聖書の神は稲妻と火の神であります。「ヨブ記」によれば、稲妻は神が使う道具なのです。(37, 3 − 4, 11 − 13)「エレミア書」(10, 12 − 13)によれば、世界創造の神は雷鳴と稲妻の神として提示されているわけです。『詩編』(77, 18 − 19)も雷鳴と稲妻を暗示しています。エロヒムは雷の神であります。神は稲妻のような輝かしい顔で現れます。(「ダニエル書」10, 6)「ヨブ記」によれば、神の手は稲妻で覆われています。そして悪に対する激しい怒りを示します。(「ヨブ記」36, 32)精神面で、稲妻は内面的な光を生み出します。主体に目を閉じ、いわば自省を促すような稲妻は、力強さの記号であり、バランスを取るエネルギーを表しています。「あなたは知っているか / どのように神が指図して / 蜜雲の中から稲妻を輝かせるかを。」(「ヨブ記」37, 14 − 18)「ヨハネによる黙示録」によれば、天に開いた門が見え、御座が掛けられていて、そこにある方が座していたとあります。「御座からは、稲妻と、もろもろの声と、雷鳴とが発していた。・・・」(4, 5)

稲妻は、雨同様、天の種子の価値を持っています。稲妻と雨は、ポジティブにせよネガティブにせよ、豊穣な表現のなかで、水−火という二重性に基づく同一の象徴の二面を構成しているわけです。それはまた、火または豪雨によって人類を消滅させる天罰でもあります。稲妻と豊饒さの象徴的な連合は東洋の思想ではしばしば見られるものです。(文献目録を参照して下さい。)

以上のように、雷をめぐるギリシア文明やキリスト教文明の特徴がうかがえるなかで、ヴィクトル・ユゴーの雷のイメージはどうとらえられるのか、

考察したいと思います。私は、ユゴーの第一小説『アイスランドのハン』の十二章の稲妻や雷鳴のイメージに、イギリスのゴシック・ロマンスの影響を直接的間接的に受けているのを感じていましたが、その後、ユゴーの初期の詩作を読み返すうちに、少年時代におけるラテン詩の翻訳のなかですでに雷が言及されていたことがわかりました。そこで、本論文では、最初に『アイスランドのハン』における雷の使われ方を記述し、その特徴を見極めたうえで、少年時代、作家デビュー時代、さらに壮年時代、亡命時代そして晩年と見て行きたいと思います。

２．初期ヴィクトル・ユゴーにおける雷

2-1.『アイスランドのハン』(1823) における雷――ロマン主義時代の雷

a. 道行としての雷の役割

道行の導入としての雷、稲妻、雷鳴と怪物アイスランドのハンの声が混じり、恐怖感が増幅されています。(第 12 章) ヒーローのオルドネールは、ガイド役の死体収容所番人スピアグドリといっしょの旅の道中、山の中で雷が鳴り、大雨に襲われます。そして宿を求めたところは、呪いの塔でした。そこには、死刑執行人とその妻ジプシー女と 3 人の子供がいたのです。

> 「このとき、大きな稲妻が湾と丘と塔をおそい、二人の旅人の目に、これらの事物のいずれも見分けがつかないうちに、消えてしまった。二人は思わず立ちどまった。稲妻のあと、ほとんどすぐに激しい雷鳴がとどろき、その響きは雲から雲へ、天まで、そして岩から岩まで、地上をのびていった。」…「あれは、嵐のなかの悪魔の笑いか、それともだれかの声か…」 新たな稲妻、新たな雷鳴が彼のことばをさえぎった。…「ご老人、稲妻でぼくらの右手にヴィグラの塔が見えたばかりですよ、街道を離れましょう、避難場所を捜しましょう」そ

のとき、老人の小言にもかかわらず、老人の手を取って建物の方に向かうと、稲妻がぴかぴかと何度も光ってわずかの距離に見えたのだった。二人は塔の下にいた。若い旅人はこの恐ろしい廃墟の新しい扉を力いっぱい叩いた。「ヴィグラの塔の暖炉よりも、嵐の稲光のほうがいいって、みんなが言っただろうからね。」（12 章　61-62 頁）

稲妻、雷鳴、悪魔の高笑い、廃墟といった素材は、ゴシック・ロマンスを髣髴とさせるものですが、稲妻の光や雷鳴の大きな轟き、それらに交じり合う怪物の声、呪いの塔ヴィグラは、老番人スピアグドリの恐怖心を煽り立てたことは想像に難くありません。

b. 死刑執行人オルジックスと教誨師ムンデルとの対話

「懲罰する男はどうして懲罰を忘れようか。雷鳴を聞きたまえ…」
「そうか！では雷鳴って何ですか？悪魔の高笑いか」
「説教は止めようぜ、老いぼれめ」と主人は雷のようなほとんど苛立った声で叫んだ。（12 章 69 頁）

死刑執行人ニコル・オルジックスと教誨師ムンデル、隠修道士と番人スピアグドリそれに若者オルドネールが雨宿りをしているなかで、雷鳴に懲罰としての意味を持たせる教誨師ムンデルの発話に対して、死刑執行人は雷鳴の轟きのような大声で抵抗するわけです。

c. 可視化する稲光

「若者はふいに立ち止まった。――稲妻の光のために、歩こうとする手前で、円形の大きな井戸のようなもの見えたのだ。稲妻の光が運よく射してこなかったら、彼はあやうく転落しただろう。彼はその深淵に近づいた。…二度目の稲光に助けられて、足元に梯子の上の

端が見えた。その梯子は井戸の底にのびていた。…やがて、頭上をおおう暗闇のなかで、しばしば照らしだす青みがかった稲光のときしか、もう空は見分けられなかった。…」(31 章 162 頁)

たった一人で暗闇の中、山岳の道のりを歩いているオルドネールにとって、稲光だけが道しるべでした。山奥の雷そのものが暗黒小説の要素でした。

2-2. ゴシック・ロマンスにおける雷のテーマ

18 世紀から 19 世紀初頭にかけて、イギリスではゴシック・ロマンスが流行っており、フランスにも翻訳がされておりました。『アイスランドのハン』を執筆中のユゴーが直に影響を受けたのは、12 章のエピグラフとして引用した C.R. マチューリン『バートラム』5 幕悲劇 (1815 刊、1821 に仏訳) でした。この翻訳をモデルにして、エピグラフとしてユゴーが採用した台詞は、『バートラム』の冒頭で、雷鳴が轟いている場面です。

「第一修道士－何という夜！天のお慈悲を！神さま！あなたはこの雷が聞こえましたか？
第二修道士－死者たちにさえ聞えたに違いない。聞いてくれ、あの恐ろしい音の最中に，人間の声が聞き分けられよう！」

雷は、廃墟としての城に、天罰、悪、怒りの象徴として現れますが、悪魔の仕業か、神の怒りかという揺れがあります。『アイスランドのハン』では、雷鳴の轟音のなかに悪魔の高笑いすなわち怪物ハンの声が混じり合っているわけです。こうした雷の淵源は、以下に挙げるゴシック・ロマンスにおける雷のテーマをたどってみると、首肯できます。

a. ホーレス・ウォルポール『オトラント城綺譚』(1763)

ホーレス・ウォルポール『オトラント城綺譚』(1763) の最期は、雷の轟

音とともに城が解体され、城主に天罰が落ちます。

> 「なに、娘は絶命？」と彼は狂乱の体で叫んだ。と、その刹那、轟然たる落雷の音が、オトラント城を礎まで揺るがした。大地は大浪のように揺れ、そして人間の着る甲冑の何層倍もあるこうかつたる響が、うしろの方で聞こえた。フレデリックとジェロムは、いよいよ城の最後の日が近いな、と思った。…すると、セオドアの姿がそこに現れたとたんに、マンフレッドの後の城壁が、ものすごい力でグワラグワラと崩れ落ちると見るや、雲突くような山のごとき巨きなアルフォンゾ公の姿が、崩れ落ちた廃墟のまんなかにびょうどうと立ち現れた。「見よ、アルフォンゾが正嫡は、セオドアなるぞ！」とまぼろしはいった。この言葉を宣示すると、アルフォンゾの亡霊は天も裂くばかりの雷鳴とともに、おごそかに昇天するとみえたが、その天には、雲の絶間に聖ニコラスの御姿が嚇亦と現れまして、アルフォンゾの御影を迎えると、まもなく二つの姿は光まばゆい一面の光明につつまれて、人間の目から見えなくなった。（173 頁）

落雷は、神の怒りの象徴として、オトラント城の崩壊をもたらすとともに、アルフォンゾの亡霊の宣示ももたらします。雷、廃墟，塔、怪物，地獄など、いかにもゴシック・ロマンスの風土が盛り込まれています。破滅と出現こそ雷の仕業にほかなりません。

b. マシュー・グレゴリー・ルイス『マンク（破戒僧）』（1796）

> 「修道僧は神の教えの麗（うるわ）しさを説いた。…聴衆は一人残らず、過去におかした罪を思いかえしてふるえおののくのだった。雷鳴がとどろき、稲妻がその身をくだきにふりかかることを思い、足もとに永遠の破滅の淵が口を開いているような気がする。」（上巻 31 頁）

悪の象徴としての修道院に蠢く恐怖とエロティシズムの結合という凄まじい小説には雷鳴と稲妻が背景として跳梁していました。

c. メアリー・シェリー夫人『フランケンシュタイン』(1818) 渋澤龍彦訳

「宿屋に入ったが一向に眠れないので、私はウィリアムの殺された場所まで行ってみようと思った。舟で湖を渡るのである。暗い夜空に稲妻が走り、美しいモン・ブランの頂が明るく照らし出されるのが見える。嵐が近づいていたのか、大粒の雨が降り出した。…そのとき、暗闇のなかの木立のかげから、人影がさっと出てきて、すばやく逃げて行ったように思われた。立ちどまって、なおも一心に目をこらすと、稲妻の一閃がそいつを明るく照らし出したので、今度はその形もはっきり分った。その巨人のような背丈と醜悪な顔貌を見れば、もう私にも疑いようはなかった。「あいつだ！あの怪物だ！」(52 頁)

18 世紀後半、雷＝電気こそ生命の根源であるという画期的な説を唱えたボローニャ大学教授ガルヴァーニに鼓舞されて、メアリー・シェリー夫人は、フランケンシュタインに、死体に電気＝雷の刺激を加えることで死体を蘇生させる人造人間を作らせるのです。

d. チャールズ・リチャード・マチューリン『放浪者メルモス』(1820)

「光と闇の格闘———闇がそれよりも恐ろしい光を威嚇するのだ。市の天使のように空に漂う青味を帯びた鉛色の雲によって光を威嚇し、矢の狙いをつけるのだが、しかし矢はいったいどこへ飛んでゆくのか。しかしながら、見よ、「敗者に災いあれ」を合言葉に押しいただく不遜な軍隊の軍旗のように巨大な紅の稲妻がサッと一閃、ローマ風の塔の廃墟を木端微塵に叩きつぶしたのだ。…」(上巻 51 頁)

悪意に満ちた稲妻の閃光、雷にやられた少女の亡骸。悪魔と契約して超人間的な力と生を得たメルモスの物語は情念の物語ですが、ここでも雷の破壊力が発揮されます。『バートラム』と『放浪者メルモス』の作者は、実は雷の想像力に裏打ちされた作家と言え、若きユゴーは大いに影響を受けたのです。

2-3『アイスランドのハン』における雷の隠喩

陰謀家ダーレフェルド伯爵の犯罪的行為に対して懲罰＝雷鳴の轟きがくだされます。息子の死を見せ付けられたダーレフェルド伯爵の不幸の感情を、「これらの二ページでかろうじて描写したあらゆる感情は、雷鳴の轟きのようにいっしょに彼の心に襲いかかった。・・・」（25 章 141 頁）と表現しています。

最後に、ダーレフェルド伯爵夫人が家臣ムスデモンに当てた不倫の手紙＝雷をかざして、ダーレフェルド伯爵は妻の部屋へ入っていきました。

> 「青ざめ引きつったダーレフェルド伯爵は、…せめて自分を裏切った惨めな女にもう一度会いたかった。彼は、まるで雷をとらえたかのように、手に手紙を揺らしながら、急ぎ足で大広間を横切る。」（51 章 251 頁）

しかし、妻はすでに息子フレデリックの死を知り、気が狂っていたのです。

3. 『アイスランドのハン』以前の雷

a）少年時代の文学経験と雷あるいはギリシア神話の雷

ヴィクトル・ユゴーの文学的出発点から、雷は主要な要素を形成していました。1816 年の詩『世界最後の日』は、ユゴーの宇宙的な詩の嚆矢として注目すべき習作ですが、太陽の死という終末をテーマとした 14 歳の詩に、

すでにl' éclairやla foudreを登場させ、恐怖感を演出しています。さらに『大洪水』（1816）という、三つの歌からなる叙事詩でも、雷の轟音、すばやい稲妻の不吉な光景を歌い、恐怖心を暗示していました。キリスト教文学的雰囲気を持った詩でありましたが、大洪水のテーマにとって雷はきわめて重要な構成要素であることには否めません。

O terreur ! L'éclair luit sur ma tête tremblante,
La nue est embrasée et la foudre bruyante
　　Gronde de toutes parts.
おお　恐怖よ！稲妻が私のふるえる頭の上で輝く
暗雲はくすぶり、騒々しい雷が
　　四方八方からゴロゴロ鳴る。
『世界最後の日』

さらに「大洪水」という三つの歌からなる叙事詩でも、雷が歌われます。

L'air était embrasé... les éclats du tonnerre
Roulant avec fracas faisaient trembler la terre...
大気は燃えていた・・・雷鳴の音は
けたたましく鳴り響き大地をふるわせていた
L'éclair brille trois fois,trois fois la foudre gronde
稲妻は三度輝き、三度雷がなる
Quand le tonnerre éclate est frappé par l'orage
雷鳴が勃発し嵐に打たれるとき
D'un Tonnerre lointain les éclats redoublés
Augmentent la terreur des mortels accablés
Et des flancs sulphureux d'une effroyable nue

L’ombre au loin se répand sur la terre éperdue.
Des rapides éclairs la sinistre lueur
De cette sombre nuit accroît encor l’horreur,
遠くの雷鳴の倍加した音が
打ちのめされた人間どもの恐怖を増していた
恐ろしい暗雲の悪魔のような横腹から
遠くの影が取り乱した大地に広がり
すばやい稲妻の不吉な光が
あの暗い夜からさらに恐怖を増幅させていた
Le fracas de la pluie et le bruit du tonnerre,
Passait...
雨のけたたましい音と雷鳴の騒音が
通り過ぎてゆく・・・　　『大洪水』

他方、ユゴー少年は、ヴェルギリウスの『農耕詩』や『アエネーイス』を翻訳経験によって、雷のイマージュリーを形成したと思われます。

ヴィクトルが訳したヴェルギリウス「農耕詩」第一の書（1816 年 11 月）の翻訳に、

Un ciel pur est troublé des éclats du tonnerre
澄み切った空が雷鳴の轟音に乱される

といった表現に見られるように、空の清澄さとそれを乱す雷鳴の音とのコントラストが特徴的です。

ホラチウス『詩法』の影響によるユゴーの断片詩のなかに、すばやい詩句＝稲妻、ごろごろ轟きながら雷鳴を模倣する詩句という表現があります。

Le vers rapide vole et fuit comme l'éclair
すばやい詩句は稲妻のように飛んでは逃げ去る
Que le vers en grondant imite le tonnerre ;
ゴロゴロ叱りながら詩句は雷鳴をまねる

ラテン文学最大の叙事詩、ヴェルギリウス『アエネーイス』の「キュクロプス族の洞穴」の翻訳（1820）の中にも、雷鳴の主に地上で彼の腕が轟かせている雷をつくり、「稲妻と激怒を、霰の三つの光線、炎の三つの光線、音、そしてわれわれの魂を打ちのめす恐怖を混ぜていた。」や「アシェメニド」でも「アンスラドは、暗くなった岩の下に雷が黒くした広い横腹を隠していると、言われている」というふうに、翻訳経験時に雷のイメージを抱いていたことは、後の創作における雷の跳梁と関係がなくはないと思われます。

4．『オードとバラード』（1820-1828）における雷

「ボルドー候の誕生」（1820）、「ブオナパルテ」（1822）、「幻視」（1823）、「僕のオードへ」（1823）、「僕の父へ」（1823）、「エトワル広場の凱旋門に」（1823）、「アルフォンス・ド・L 氏へ」（1823）、「シャトーブリアン氏へ」（1824）、「G,-A. ギュスタフソン大佐へ」（1825）、「詩人」（1823）、「竪琴とハープ」（1822）、「霊魂」（1823）、「反キリスト」（1823）、「わが友 S.B. へ」（1827）、「悪夢」（1822）、「夏の雨」（1828）、「巨人」（1825）、「乱闘」（1825）、「二人の射手」（1825）、「二つの島」（1825）、「ヴァンドーム広場の柱に」（1827）、「最後の吟唱詩人、オシアン詩」（1819）といった詩の中で、雷鳴や稲妻や雷が歌われています。ウルトラによって王位簒奪者と呼ばれていたナポレオンは、「雷を打つ手によって選ばれた男」choisi par la main qui foudroie「生きた災害のように現れる男」paraît,comme un fléau vivant（Buonaparte 1822）であり、「ナポレオンを打ちのめした雷は、生まれつつある凱旋門の正面を叩きつけたよ

うだ」la foudre,en terassant ton maître ; / semble avoir frappé ton front encore à naître（A l’Arc de Triomphe de l’Etoile 1823）し、ナポレオンの生まれ故郷コルシカ島も追放の地セント・ヘレナ島も、雷の打撃を受けて煙を上げています。皇帝のエリアを高いところに築いたナポレオンは、雷の上昇により、「自分のエリアから逆さまに、何百という雷鳴を轟かせ、煙を上げながら、落ちた。」Renversé de son aire,/ Il tomba tout fumant de cent coups de tonnerre（Les Deux Iles 1825）「盗んだ雷で鍛造したヴァンドーム広場の青銅の、それぞれの輝きは稲妻となる！」 De ce bronze,forgé de foudres étouffées, / Chaque étincelle est un éclair ! (A la Colonne de la Place Vendôme III 1827) というように、ナポレオン神話と雷の親和作用が注目されるでしょう。さらに補遺として、北欧的な想像力に裏打ちされたオシアン詩では、さまようフィンガルの槍は稲妻の束で、鈍い爆音の雷の轟きと沈黙が三度繰り返されるのです。la lance de Fingal qui erre est un faiseau d’éclairs,la foudre en sourds éclats roule et se tait trois fois また裁きと罰と許しをもたらすモーセやイザヤの目は稲光に満ちている les yeux de Moise et de Isaie sont pleins d’éclairs といった旧約聖書のイマージュリーや、コーカサス山からアトス山まで滑空する鷲は稲妻の上を飛んでゆく l’aigle plane du Caucase à l’Athos といったギリシア神話のイマージュリー、さらには大砲と雷鳴との類似的なイメージから、戦争と雷のイマージュリーが、現れています。そしてさらに戦争と雷と詩作という類縁性へ発展するのです。「詩作は戦争のようなもので、ストロフはしばしば殺害をもたらす弾丸のようなもの、二つの押韻はキャンプの前線で鳴る二つのシンバルだ。それを耳にすると、すべてが身震いする。兵士は戦場を夢見る。稲妻はゴロゴロなる青銅の大砲から生じる」（「最後の詩集」）以下、この時代に歌われた雷に関する詩句を列挙いたします。

«Fils d’un mont frappé du tonnerre, »(LA NAISSANCE DE DUC DE BORDEAUX 1820)

«Près du trône où dort le tonnerre
Parut un spectre centenaire » (VISION 1823)
« La foudre en grondant vous éclaire, » (A MES ODES 1823)
«Mesurez la hauteur du géant sur la poudre
Quel aigle ne vaincrait,armé de notre foudre ? » (A MON PERE 1823)
«Ah ! nous ne sommes plus au temps où le poète
Parlait au ciel en prêtre,à la terre en prophète !
Que Moise,Isaie,apparaisse en nos champs,
Les peuples qu'ils viendront juger,punir,absoudre,
Dans leurs yeux pleins d'éclairs méconnaîtront la foudre
Qui tonne en éclats dans leurs chants. » (A M.ALPHONSE DE L.)
«Une vie éminente est sujette aux orages :
La foudre a des éclats,le ciel a des nuages
Qui ne s 'arrêtent qu'aux grands monts ! »
«La gloire en ses trésors augustes
N'a rien qui soit plus beau qu'un laurier foudroyé ! »
(A M.CHATEAUBRIAND 1824)
«Il vit des cieux vengés tomber avec sa foudre
Cet aigle dont le vol douze ans se fatigua cet aigle-Napoléon
Du Caire au Capitole et du Tage au Volga ! »
(AU COLONEL G.-A.GUSTAFFSON 1825)
«Un formidable esprit descend dans sa pensée
Il paraît ; et soudain,en éclairs élancée,
Sa parole luit comme un feu.
Les peuples prosternés en foule l'environnent,
Sina mystérieux,les foudres le couronnent,
Et son front porte tout un Dieu ! » (LE POETE 1823)

«L'Aigle est l'oiseau du Dieu qu'avant tous on adore.
Du Caucase à l'Athos l'Aigle planant dans l'air,
Roi du feu qui féconde et du feu qui dévore,
Contemple le soleil et vole sur l'éclair ! »

(LA LYRE ET LA HARPE 1822)

«Les foudres se croisant dans leur sphère tonnante, » (L'AME 1823)

«Ils se demanderont si les feux de sa tête
Sont des rayons ou des éclairs. » (L'ANTE-CHRIST 1823)

«L'Aigle,c'est le génie ! oiseau de la tempête,
Et dont l'œil flamboyant incessamment échange
Des éclairs avec le soleil. »

«Quelque rocher,creusé par un coup de tonnerre »

«Pourquoi donc t'étonner,Ami,si sur ta tête,
Lourd de foudres,déjà le nuage s'arrête ? »

«Fais-toi connaître,aiglon,du soleil,de la foudre. »

(A MON AMI S.B. 1827)

«Deux éclairs sont ses yeux,deux flammes sont ses ailes,
Il (le monstre) vole sur un lac de feu ! » (LE CAUCHEMAR)

«L'arc-en-ciel ! l'arc-en-ciel ! Regarde.-
Quel trésor le Dieu bon nous garde
Après le tonnerre et l'éclair ! » (PLUIE D'ETE 1828)

«Je combattais l'orage,et ma bruyante haleine
Dans leur vol anguleux éteignait les éclairs ; » (LE GEANT 1825)

«Leurs pas courts et pressés roulent comme la foudre... »

(LA MELEE 1825)

«Les rires éclataient aussi haut que la foudre,
La flamme en tournoyant s'élançait de la poudre,

Comme pour s’unir à l’éclair ! » (LES DEUX ARCHERS 1825)
«Sa lance est un faiseau d’éclairs,
Son char roule sur les orages ; »
«Et le sourd fracas du tonnerre
Dit que ces rocs affreux sont les rocs de Tremnor. »
«La foudre en sourds éclats roule et se tait trois fois ; »
«Tremble ! il t’apporte enfin,dans sa main foudroyante,
Ce qur tes forfaits t’ont promis. »
«Ils ont chanté : la foudre gronde.
Du sommet des rochers dans les gouffres ouverts,
Ils s’élancent...Le bruit de leur chute profonde
Roule et s’accroît dans les déserts.»
(LES DERNIERS BARDES POEME OSSIANIQUE)

５．「東方詩集」（1829）における雷あるいはイスラムの魔神

「なんでまた猛り狂った稲妻がときおり大蛇のように飛び出すのか？」(「天の火」）O terreur! De son sein,chaos mystérieux,/D’où vient que par moments un éclair furieux/ Comme un long serpent se déchaîne?

「雷が蛇行する黒雲」（「マゼッパ」）Pareil au noir nuage où serpente la foudre, MAZEPPA、「規則正しく口を開いて雷鳴を轟かせ」（「ナヴァリノ」）Ouvrant à temps égaux ses gueules foudroyantes、「稲妻のようにすばやく敵軍をおおう」（「敗戦」）Couvrir d’éclairs les bataillons、「雷鳴のように轟く大砲」（「ラザラ」）Foudroyantes artilleries、「稲妻の輝きはほんのわずかしか続かない」（「幽霊」）Il faut que l’éclair brille,et brille peu d’instants ;（FANTOMES1828）というように、『東方詩集』において、雷のイメージは、細長い形状とすばやさを表象する蛇となり、雷鳴の音響的なイメージが戦

場での大砲の轟きとなり、ナポレオンは力強い皇帝として「目に稲妻を宿す」(「彼」) Grave et serein,avec un éclair dans les yeux. (LUI 1827) と表現されます。「魔神」は、静から動へ、沈黙から騒音へ、穏やかさから激しさへとクレッシェンドし、頂点に立ったあとで、やがてデクレッシェンドして、静へ、沈黙へ、平穏さへと戻るといった、聴覚的な幻想の世界でありますが、「重くすばやい魔神どもの一隊が / 虚空の中を飛んでくる様は / 横腹にひとすじの稲妻を閃かせた / 鉛色の雲の塊のようだ。」Leur troupeau lourd et rapide,/Volant dans l'espace vide, /Semble un nuage livide/Qui porte un éclair au flanc. 魔神の到来と共に雷鳴が轟き、やがて魔神が去っていくと、静けさと沈黙が再び回復するのです。

6.『秋の木の葉』(1831) あるいは海上の崇高な雷

『秋の木の葉』の「ラマルチーヌ氏に」は、航海がテーマで、「それぞれの波を赤くする稲妻は / 炎のたてがみを / これら海の軍馬たちにつけていた」L'éclair rougissant chaque lame/Mettait des crinières de flamme/A tous ces coursiers de la mer ! あるいは「崇高な雷が / 深淵の上で火となって滑空していたが、/ 私たちは歌っていた、大胆な水夫よ」Tandis que la foudre sublime/Planait toute en feu sur l'abîme,/Nous chantions,hardis matelots, あるいは「もしわたしが天の加護を祈ったら / 嵐が、さらなる轟音と怒りで / 稲妻の束を揺らしていた」Si j'invoquais le ciel, l'orage,/Avec plus de bruit et de rage,/Secouait sa gerbe d'éclairs ! というふうに海上での雷のイマージュリーを歌っていました。さらに「落日」では、「波なす雲のしたに、ときたまきらめく青白い稲妻。それは空に住むひとりの巨人がやにわに、雲の中に、剣をぬいたかのよう」Sous leurs flots par moments flamboie un pâle éclair,/Comme si tout-à-coup quelque géant de l'air/Tirait son glaive dans les nues. というように、人間形態化した自然としての稲妻のイメージは、巨人が

引き抜いた剣になるのです。

７．ナポレオンと雷あるいは『薄明の歌』（1835）

『薄明の歌』（1835）の「柱に」では、ナポレオンの進軍を「轟く進軍」sa marche tonnante と歌い、「もし暴君に深淵しか、雷鳴しか得られなければ」S'il ne garde aux tyrans qu'abîme et que tonnerre と歌っています。とりわけ「ナポレオン二世」では、「明日、それは帆船に落ちる稲妻だ」Demain, c'est l'éclair dans la voile, という表現で、未来の不確実性を喚起します。「そうだ、ある日の夕暮、永遠の大空を舞っていた大鷲を、一陣の突風が襲って両の翼を打ち砕いた。鷲は稲妻のような跡を空に描いて落ちた。・・・」Oui,l'aigle,un soir, planait aux voûtes éternelles,/Lorsqu'un grand coup de vent lui cassa les deux ailes ;/Sa chute fit dans l'air un foudroyant sillon ; と歌っているように、ナポレオンは鷲のイメージで、稲妻の軌跡を描いて落下するということは、ナポレオン＝鷲＝稲妻というつながりがユゴーのなかで明確になっていました。

８．『ライン河』（1842）

「美男ペコパンと美女ボールドゥールの物語」Légende du Beau Pécopin et de la Belle Baudour では、稲妻のようにすばやいギャロップの馬に乗ったペコパンや、「人間が深淵に落ちるときには、これから去ろうとしている生の世界と、入っていこうとしている死の世界が、一瞬、すばやい稲妻のようにまぶたに浮かぶのです。」（189 頁）Quand un homme tombe dans un gouffre, c'est un terrible éclair que celui qui frappe sa paupière en ce moment-là et qui lui montre à la fois la vie dont il va sortir et la mort où il va entrer. という言説に見られるように、雷が比喩として使用されているだけで

なく、「神様と同じように、悪魔も自分の思うままになる雷を持っていました。しかし、それは地中から出てきて、木を根こぎにしてしまうという、恐るべき下等な雷なのです。」（204 頁） Le diable,comme Dieu,a le tonnerre à ses ordres ; mais c’est un affreux tonnerre inférieur qui sort de terre et déracine les arbres. といっているように、悪魔の武器としての雷を問題にしています。面白いことに、悪魔の雷は、地中から生まれ、木を根扱ぎにする、レベルの低い雷だとしていることです。ギリシアの伝統では、雷は地中から出てきて、それは人類の地震の記憶に依拠していると、先に述べましたが、キリスト教となって、それが悪魔の雷になったのでしょうか。優等な雷から下等な雷へ、神から悪魔へと落ちたと言えるでしょう。

９．ナポレオン＜雷を盗んだ男＞あるいは『懲罰詩集』（1853）

ナポレオンは、「雷を盗んだ男を捕らえると、…皇帝の心臓をついばめ、とけしかけながら。」 Le Destin.../Saisit ...ce voleur du tonnerre,/...excitant../Le vautour Angleterre à lui ronger le coeur. （『懲罰詩集』1853「贖罪」）と歌われているように、プロメテウス神話と重ね合わせられています。プロメテウスは、天から火を盗んで人間に与えたことをゼウスにとがめられ、その罰としてカフカス山に鎖でつながれました。大鷲に臓腑を毎日ついばまれたが、夜のうちに臓腑が回復するので、こうした苦しみを絶えず受けなければならなかった、といいます。禿鷹イギリスがナポレオンの心臓をついばむのでした。「かつて稲妻をつかんでいた手は、ああ、ボナパルトよ」Cette main qui portait la foudre,ô Bonaparte,

「小ナポレオン」というシャンソンでは、大ナポレオンとの対比において小ナポレオンの矮小性を強調します。そこでも、大ナポレオンは「手に人類の栄冠と雷と手綱をもって、山々や平原を通り過ぎていた」 Il passait les monts etes plaines,/Tenant en main/La palme, la foudre et les rênes /Du genre

humain ; のです。

10. フランクリンあるいは『静観詩集』（1856）における雷

「我行かん」（『静観詩集』）では、闇と虚空の入口すなわちぱっくり開いた深淵近くで黒い稲妻が発生し続けていますが Jusqu'au seuil de l'ombre et du vide,/Gouffres ouverts/Que garde la meute livide/Des noirs éclairs, 、青白い猟犬の群がその入口を守っている、雷鳴たちが吼え続けるならば、私こと孤高の詩人、翼ある夢想家は、ライオンのように、吼え返すだろうと、Et,si vous aboyez,tonnerres,/Je rugirai. 歌います。雷と対決する詩人の歌です。「恐怖」のなかで、雷の一撃は死を意味していました。生命である稲妻の光が作られるのは、死を意味する雷の一撃であるかどうか、疑問を投げています。「この世では事物は事物にとって一つの問題であり、存在は存在にとって謎である。曙は日光にとっては青白く見える。稲妻は太陽にとっては黒いのだ。漠然としたたそがれの創造において、不吉な日光に照らされて、狼狽する事物は、互いにヴィジョンなのだ。」La chose est pour la chose ici-bas un problème, /L'être pour l'être est sphinx. L'aube au jour paraît blême ;/L'éclair est noir pour le rayon. /Dans la création vague et crépusculaire,/Les objets effarés qu'un jour sinistre éclaire,/Sous l'un pour l'autre vision.「祭司」において、「暴風雨が冬には葉むらを、こずえに稲妻を、海辺に波を、嵐に光線を壊す Il brise à l'hiver les feuillages,/L'éclair aux cimes, l'onde aux plages,/ A la tempête le rayon …暴風雨は盲目の力、それは怒りと雷で、暴風雨は人間に野蛮と犯罪と名づけられ、天空には暗闇、神には悪魔、それは自然全体を恐れる物質の息吹なのだ Il est rage et foudre ; il se nomme/ Barbarie et crime pour l'homme,/ Nuit pour les cieux,pour Dieu Satan.」。それに対して光の暴風雨である精霊が、暴風雨を追求し、捕らえ、締め上げてしまいます。L'Esprit,ouragan de lumière,/Le poursuit,le saisit,l'étreint この精霊こそ祭司

le mage であり、思想の闘士 Tous les combattants des idées であり、神の剣士 Tous les gladiateurs de Dieu であり、その一人としてフランクリンを挙げています。「来たれ、フランクリンよ、ほら雷鳴だよ」Viens,Franklin ! voici le Tonnerre

11.「諸世紀の伝説」（1859）における雷―ギリシア神話と近代の融合

「サテュロス」「父親殺し」「王女の薔薇」「大空」などで、雷のイメージはそれらの背景に不可欠の要素として使われています。とくに国境付近、洞窟の入口、深淵の入口付近で、稲妻は陰気な光を放ったり、雷鳴が轟いたりしています。祈りが雷の鈍い音となり、巨大な電光が深い夢想からほとばしりでます。またゼウスのように、フェリペ王の右手に雷の束を握っており、だれもその束を解くことはできません。

« Quoique à peine fût-il au seuil de la caverne
De rayons et d’éclairs que Jupiter gouverne, »
ユピテルが支配する陽光と稲妻に満ちた
洞穴の入り口にやっとの思いで立ったけれど
« Le tonnerre n’y put tenir, il éclata ; »
雷鳴は我慢ならず，爆発した。
« Grâce au hideux complot de tous les guets-apens,
Les flammes,les éclairs, sont contre serpents, »
あらゆる罠の醜悪な陰謀のおかげで
炎や稲妻は　人間に対抗して蛇となり，
« Qui sait si quelque jour on ne te verra pas,
Fier,suprême, atteler les forces de l’abîme,
Et, dérobant l’éclair à l’inconnu sublime,
Lier ce char d’un autre à des chevaux à toi ? »

いつの日か　誇り高い　最高の君が
深淵の力をつなぎとめ
崇高な未知から電光を盗みつつ
他の者の戦車に君の馬車をつなぐ姿が見られるかは誰が分かるか？

« Il ne lui dira pas : Envole-toi,matière !
S'il ne franchira point la tonnante frontière, »
人間は　物質よ　飛び立て！と命じないか
雷鳴轟く国境を二度と越えないか

« Les foudres l'entouraient avec de sourds éclats ; »
雷が鈍い輝きを放ちながら彼を取り囲み

(*LE SATYRE*)
「サテュロス」（335-350 頁）

« Il vit l'infini,porche horrible et reculant
Où l'éclair, quand il entre, expire triste et lent, »

(LE PARRICIDE)
彼は見た、際限なくうしろへ延び、彼が園に踏み込むと、
稲妻が陰気な光を放ちながら、ゆっくりと消えてゆく、
恐ろしい入り口のような無限を

「父親殺し」（157 頁）

« Sa prière faisait le bruit sourd d'une foudre ;
De grands éclairs sortaient de ses songes profonds. »

(LA ROSE DE L'INFANTE)
彼の祈りは、さながら音のない稲妻。
巨大な電光が、胸中に深くひそむ思いからほとばしり出る。

「王女の薔薇」（166 頁）

« Philippe dans sa droite a la gerbe des foudres ;
Qui pourrait délier ce faisceau dans son poing ? »

フェリペは右手に雷の束を握っている。
この手が握っている雷の束を、誰がばらばらにほどくことができよう？

« Est-ce l'aimant qui s'est fait aider par l'éclair
Pour bâtir un esquif céleste avec de l'air ? »

(*PLEIN CIEL*)

磁気の力なのか、稲妻の助けを借りて、
空気を使い、空の小舟を—

「大空」（181 頁）

「人間の上昇」（『通りと森の歌』）では、「フランクリンが紐でつかまえる巨大なマリオネット」と雷をイメージ化しています。

« Le tonnerre au bruit difforme
Gronde...-on raille sans péril
La marionnette énorme
Que Franklin tient par un fil. »

L'Ascension humaine in Les Chansons des rues et des bois

「祭司」で取り上げられたテーマが『通りと森の歌』でふたたび形を変えて歌われており、」さらに『諸世紀の伝説』の「深淵」ではギリシア神話と近代が融合して、「カフカス山に繋がれたプロメテウスは叫び声を上げる、/ フランクリンが雷を盗むのを見てびっくりして」Prométhée, au Caucase enchaîné,pousse un cri,/Tout étonné de voir Franklin voler la foudre ; と歌うことになります。

12.「神」、「悪魔の終焉」のおける雷

「ザーク島アルバム」(1859) では、Z 文字の形態が稲妻を示していることから、「突然 Z 型の土砂降り雨になる / その Z は稲妻の形をなしていた」

Soudain il pleut des-z-hallebardes
Dont les Z faisaient les éclairs.
(Album Ile Serk)

と歌っているように、ヴィクトル・ユゴーは Z というシニフィアン（形態）に注目しています。「悪魔の終焉」では、雷に打たれて落下するサタン、雷に向かって笑いつばを吐くサタン、そして稲妻天使が道行役で登場します。

« Il tombait foudroyé, morne, silencieux, »
La foudre alors gronda dans les cieux froids et sourds.
Satan rit, et cracha du côté du tonnerre.
Elle couvrait d'éclairs splendides le rocher ;
Flamboyait ; et c'etait,sous un sourcil charmant,
Le regard de la foudre avec l'œil de l'aurore. »
« L'ange Eclair travaillait dans cet antre des cieux ;
Il en faisait sortir tous les chars du tonnerre : »

13.『海に働く人々』（1866）のヴィジョンとしての雷

『アイスランドのハン』が山の雷であるのに対して、『海に働く人々』では文字通り海の雷が問題で、事物という宿命と戦うヒーロー・ジュリヤットの冒険の過程に雷が現れます。『海に働く人々』における作者ユゴーのディス

クールを拾い集めてみると、いかに彼が雷を幻視したか、そして当時の科学的な関心への橋渡しになっていたか、がうかがい知ることができます。観察し、幻視し、瞑想し、描写し、物語化したかを、辿って見ます。

「真っ赤に染まった別の雲は、電光を轟かせて輝き、やがて不気味に暗くなる。放電してしまった雲は黒くなり、消えた炭のようだ。…」（233 頁）

D’autres nuages, pleins de pourpre,éclairent et grondent, puis s’obscurcissent lugubrement ; le nuage vidé de foudre noircit, c’est un charbon éteint. (Les Travailleurs de la Mer ;p.255)

・回転する二重の逆円錐＝ピラネージ幻想

「回転する二重の逆円錐、他方の尖端の上でバランスをとっている尖端，二つの山のくちづけ、盛り上がる水泡の山、降下する雲の山、波と闇の恐ろしい交尾である。竜巻は、聖書が語る円柱のように、昼を暗くし夜を明るくする。竜巻を前にしては雷さえも沈黙する。雷も恐れているように見える。」（234 頁）

;c’est la trombe, le Prester des anciens, stalactite en haut, stalactite en bas, double cône inverse tournant, une pointe en équilibre sur l’autre, baiser de deux montagnes, une montagne d’écume qui s’élève, une montagne de nuée qui descend ; effrayant coit de l’onde et de l’ombre. La trombe, comme la colonne de la Bible,est ténébreuse le jour et lumineuse la nuit. Devant la trombe le tonnerre se tait. Il semble qu’il ait peur. (Ibid.p.255)

・音階としての暴風雨

「孤独の大きな混乱には、音階がある。恐るべきクレッシェンドだ。

疾風、突風，狂風、雷雨，暴風，暴風雨，竜巻の順である。それは風の竪琴の七本の弦、深海の七つの音符である。…」（234 頁）

Le vaste trouble des solitudes a une gamme : crescendo redoutable : le grain, la rafale, la bourrasque, l'orage, la tourmente, la tempête, la trombe : les sept cordes de la lyre des vents, les sept notes de l'abîme. (Ibid.p.255)

・光は海からやってくる

「磁気圧は水の発火とでも名づけられるものによって出現する。光が海水から発生する。電気を帯びた大気，燐光を放つ海水。雷雨は囁きを先立ててやってくる。」（235 頁）

Seulement la tension magnétique se manifeste par ce qu'on pourrait nommer l'inflammation de l'eau. Des lueurs sortent de la vague. Air électrique,eau phosphorique. ...Tout orage est précédé d'un murmure.... »(p.257)

「すべての雨は熱帯から発生し、すべての稲妻は極地から発生する」

Il (Messier) disait : « tout en pluie vient du tropique et tout éclair vient du pôle ». (p.258)

・夢想としての雷

「雷の中には夢想がある。夢のようなこの場所での狂暴な現実には、日とを震えあがらせるようなものがあった。…」（241 頁）

Il y a du songe dans le tonnerre. Cette réalité brutale dans la région visionnaire a quelque chose de terrifiant. On croit entendre la chute d'un meuble dans la chambre des géants. (p.262)

「帯電した炎は、どれ一つとして衝撃音を伴わず、暗黒の嵐のようだった。ふたたび沈黙が訪れた。ポジションをとるときのように，一種

のインターヴァルがあった。次に、ゆっくりと間をおいて、次から次へと、さまざまな形の大きな稲妻が出現した。」(242 頁)

Aucun flamboiement électrique n'accompagna le coup. Ce fut comme un tonnerre noir. Le silence se refit. Il y eut une sorte d'intervalle comme lorsqu'on prend position. Puis,apparurent,l'un après l'autre et lentement,de grands éclairs informes.

・野獣としての雷…身体としての宇宙

これらの稲妻は、ゴロゴロという音もしなかった。稲妻が光るたびに、あたり一面が照らし出された、黒雲の壁はいまや野獣の穴と化していた。ドームとアーチができ、そこにいくつかの物影が認められた。怪物の頭がぼんやりと浮かび、首を伸ばしているようだった。曲芸をする象たちが、ちらりと姿を見せては、消えていった。中央、真赤なぶ厚い壁の下に、濃霧の核がはまり込み、不動のまま、力なく、雷気火花も通さず、暴風雨の腹の中の醜悪な一種の胎児のようだった。つぎに二度目の稲妻が閃き、風が巻き起こった。

影の待機は極点に達していた。最初の雷鳴は海をゆり動かし、二度目は黒雲の壁に上から下まで割れ目をつけ、穴ができ、宙ぶらりんになっていた驟雨がぜんぶこちら側に注ぎ、亀裂は雨いっぱいの開いた口のようになり、そして暴風雨の嘔吐がはじまったのだ。(242 頁)

Ces éclairs étaient muets. Pas de grondement. A chaque éclair tout le mur de nuages était maintenant un antre. Il y avait des voûtes et des arches. On y distinguait des silhouettes. Des têtes monstrueuses s'ébauchaient ; des cous semblaient se tendre ; des éléphants portant leurs tours,entrevus,s'évanouissaient. Au centre,sous des épaisseurs vermeilles, s'enfonçait, immobile,un noyau de brouillard dense, inerte, impénétrable aux étincelles électriques, sorte de fœtus hideux dans le

ventre de la tempête.

...Puis il y eut un second coup de tonnerre. Le vent se leva. L'attente de l'ombre était au comble ;le premier coup de tonnerre avait remué la mer, la deuxième fêla la muraille de nuée du haut en bas, un trou se fit, toute l'ondée en suspens versa de ce côté,la crevasse devint comme une bouche ouverte pleine de pluie, et le vomissement de la tempête commença.

・瞬間の詩学＋怒りの詩学

その瞬間は恐ろしかった。にわか雨、大風、電光、雷鳴、雲に達する波、水泡、爆発音、強烈なねじりあげ、悲鳴、叫喚、風の吹きすさぶ音、これらすべてが一度に襲来した。怪物たちが怒り狂ったのだ。

風は稲妻となって吹いていた。雨は降るのではなく、崩れ落ちていた。（242 頁）

L'instant fut effroyable. Averse, ouragan, fulgurations, fulminations, vagues jusqu'aux nuages, écume, détonations, torsions frénétiques, cris, rauquements, sifflements, tout à la fois. Déchaînement de monstres.

Le vent soufflait en foudre. La pluie ne tombait pas,elle croulait.

雷雨の轟音はたかまってきた。…無尽蔵なもののこの放蕩には何だか知れぬ卑怯さがある。これは呼吸している無限なものの肺だという感じである。…影の天上のまんなかにひっくりかえった一種の広い漏斗状煙突口があり、そこから竜巻, あられ, 黒雲, 緋色, 燐光, 夜, 光, 騒音, 雷がごちゃごちゃに落ちていたが、それほどにも渦巻きをこうして傾けるのは恐るべきことなのだ！…雷が鳴るたびに彼（ジリヤット）はハンマーの音でそれに答えた。彼のまわりの激動はわ

きたつ釜のようだった。大音響と喧騒があった。ときおり稲妻が階段を下りてくるようだった。電気撃発は耐えず，……南の風は雨がより多く，北の風は雷がより多いのである。（244 頁）

L’étourdissement de l’orage allait croissant. Toute la tempête est coup sur coup.... Il y a on ne sait quelle lâcheté dans cette prodigalité de l’inépuisable. On sait que c’est le poumon de l’infini qui souffle.... Il y avait au milieu du plafond d’ombre une espèce de vaste hotte renversée d’où tombaient pêle-mêle la trombe,la grêle, les nuées, les pourpres, les phosphores, la nuit, la lumière,les foudres, tant ces penchements du gouffre sont formidables !... A chaque coup de tonnerre il répondait par un coup de marteau. ... Le bouleversement autour de lui était comme une chaudière qui bout. Il y avait du fracas et du tapage. Par instants la foudre semblait descendre un escalier. Les percussions électriques revenaient sans cesse aux mêmes pointes de rocher,...Le vent du sud a plus d’eau, le vent du nord a plus de foudre.

電光が口火を切り、天頂の青白い口を閉じ，一陣のにわか雨が激しく落ちてきて、あたり一面がまた暗くなり、稲妻いがいの光はもうなかった。暗い攻撃がやってきたのだ。（244 頁）

Un éclat de foudre donna le signal,l’ouverture pale du zenith se ferma,une bouffée d’averse se précipita,tout redevint obscure,et il n’y eut plus de flambeau que l’éclair. La sombre attaque arrivait. …Le tonnerre grondait sourdement.

力強い大波が、稲妻の相次ぐ光で見えるところ、東のほう、『人間岩』の向こうで起こった。それはガラスの大きなローラーに似ていた。群青色で泡はなく、海全体を堰き止めていた。防波堤に向かって進んでくる。近づくに連れて、ふくらみ、大洋の上を転がる何だか知れぬ大きな闇のシリンダーだった。雷が陰にこもって鳴っていた。

Unè puissante houle, visible dans les coups sur coups de l'éclair, se leva à l'est au delà du rocher l'Homme. Elle ressemblait à un gros rouleau de verre. Elle était glauque et sans écume et barrait toute la mer. Elle avançait vers le brise-lames. En approchant, elle s'enflait ; c'était on ne sait quel large cylindre de ténèbres roulant sur l'océan. Le tonnerre grondait sourdement.

なおまた、完全な暗さではなかった。暴風雨は、稲妻に照らされたり盲目にされたりし、断続的に見えたり見えなかったりするものだ。いっさいが白く、ついでいっさいが黒くなる。人は幻の外出と闇の帰宅に立合うのである。(245 頁)

Du reste,ce n'était point l'obscurité complète. Les tempêtes, illuminées et aveuglées par l'éclair,ont des intermittences de visible et d'invisible. Tout est blanc, puis tout est noir. On assiste à la sortie des visions et à la rentrée des ténèbres.

・錯乱としての雷

雷雨は最高潮に達していた。暴風雨は恐ろしいものに過ぎなかったが、雷雨は身の毛がよだつすさまじいものになった。海の痙攣が空に伝染していた。黒雲はそれまでに最高権者になっていて、したい放題にやっているようで、推進力を与え、波に狂気を注ぎ込んでいたが、それでも何だか知れぬ不吉な明晰さを保っていた。下には発狂、高いところは怒りだった。…暴風のなかには狂った瞬間がある、空にとっては一種の錯乱である。深淵はもう何をすればよいかわからない。盲滅法に雷が打つ。これほど恐ろしいことはない。いまわしい時刻だ。暗礁の振動は最大になっていた。すべての雷雨は不思議な方位をもっているが、そんな瞬間はそれも失う。それは暴風雨の不吉な場所である。そんな瞬間には、「風はたけり狂った気違

いである」と、トーマス・フラーは言った。暴風雨の中でピディングトンが「稲妻の滝」と呼んでいる電気の不断の消費がなされるのは、そんな瞬間である。そんな瞬間には黒雲のもっとも黒いところに、なぜだかわからない宇宙の狼狽ぶりをうかがうために、スペインの老水夫たちが「暴風雨の眼」（台風の目）と呼んでいた青い光の輪があらわれる。（250 頁）

L’orage atteignait son paroxysme. La tempête n’avait été que terrible, elle devint horrible. La convulsion de la mer gagna le ciel. La nuée jusque-là avait été souveraine, elle semblait exécuter ce qu’elle voulait, elle donnait l’impulsion,elle versait la folie aux vagues, tout en gardant on ne sait quelle lucidité sinistre. En bas c’était de la démence,en haut c’était de la colère. ... Il y a dans les tourmentes un moment insensé ; c’est pour le ciel une espèce de montée au cerveau. L’abîme ne sait plus ce qu’il fait. Il foudroie à tâtons. Rien de plus affreux. C’est l’heure hideuse, Tout orage a une mystérieuse orientation ; à cet instant-là,il la perd. C’est le maivais endroit de la tempête. A cet instant-là,le vent, disait Thomas Fuller,est un fou furieux. C’est à cet instant-là que se fait dans les tempêtes cette dépense continue d’électricité que Piddington appelle la cascade d’éclairs. C’est à cet instant-là qu’au plus noir de la nuée apparaît,on ne sait pourquoi, pour espionner l’effarement universel, ce cercle de lueur bleue que les vieux marins espagnols nommaient l’Œil de la Tempête,el ojo de tempestad.

その不気味な眼がジリヤットの上にあった。

Cet œil lugubre était sur Gilliatt.

…斧を手にし、稲妻に青白く照らされ、髪を振り乱し，裸足で、ぼろをまとい、顔は海の唾でおおわれた彼は、雷の巣窟の中で偉大な存在だった。

...la hanche au poing,blême aux éclairs, échevelé,pieds nus,en haillons, la face couverte des crachats de la mer,grand dans ce cloaque de tonnerres.

…度を超した雷は，終末を予告するものなのだ。（252 頁）

…L’exces de foudre annonce la fin.

雨が突然やんだ。その後、黒雲の中で雷鳴は無愛想な音しかはっしなかった。雷雨は地面に落ちる板のように停止した。折れた，といって良かった。（252 頁）

La pluie s’arrêta subitement. Puis il n’y eut plus qu’un roulement bourru dans la nuée. L’orage cessa comme une planche qui tombe à terre.Il se cassa,pour ainsi dire.

…遠雷の遠吠えが聞こえ、雨の最後の数滴が降り、雷に満ちていたこの闇全体が，恐ろしい戦車の集団のように立ち去っていった。（252 頁）

Et toute cette ombre pleine de tonnerres s’en alla comme une cohue de chars terribles.

かくして、過度の雷が終末を予告したように、『海に働く人々』における過剰の雷描写は、少年時代の詩「世界最後の日」と呼応するかのようであります。本研究は、まだユゴーの雷の詩学のアウトラインを示したに過ぎません。今後より精密に作品成立のプロセスとともに、ユゴーの詩的創造において雷がいかなる役割を果たしたか、調査研究する所存です。

本論文において引用させていただいたテキストは、一部訳語を変えたものもありますが、すべて文献目録に掲げた書物に依拠しています。頁数のみを示しましたが、著作者の皆様には謝意を表したいと存じます。

文献目録

エミール・ジュネ『ギリシア神話物語』有田潤訳、白水社、1996 年 6 月

アンドレ・ボナール『ギリシアの神々』戸張智雄・戸張規子訳、人文書院、1985

アト・ド・フリース著『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹他訳、大修館書店、1984

J. Chevalier, A. Gheerbrant ; *dictionnaire des Symbols*, mythes, rêves, coutumes, gestes, formes, figures, couleurs, nombres ; Robert Laffont, 1969

新共同訳『旧約聖書』日本聖書協会、2001

LA SAINTE BIBLE par LA BIBLE POUR TOUS ; 1955

ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、京都大学学術出版局、2001

ヴィクトル・ユゴー『ヴィクトル・ユゴー文学館』第 1 巻「詩集」（辻昶・稲垣直樹･小潟昭夫訳）第 7 巻「アイスランドのハン」小潟昭夫訳第 8 巻『海に働く人々』（金柿宏典訳）潮出版社 2000 年 12 月

ユゴー『ライン川幻想紀行』榊原晃三編訳、岩波文庫、1985

C.R.Mathurin: *Bertram ou Le Chateau de S.t-Aldobrand*, tragédie en cinq actes.（1815,traduit en francais par MM.Taylor et Ch.Nodier en 1821,）

ホーレス・ウォルポール『オトラント城綺譚』平井呈一訳、牧神社、1977

マシュー・グレゴリー・ルイス『マンク（破戒僧）』井上一夫訳（世界幻想文学大系２－ A、国書刊行会、昭和 51 年）

メアリー・シェリー夫人『フランケンシュタイン』澁澤龍彦訳 in 澁澤龍彦編「世界幻想名作集」河出文庫，1996

チャールズ・リチャード・マチューリン『放浪者メルモス』（世界幻想文学大系５－ A、国書刊行会、1977）

Victor Hugo : *Œuvres complètes* ; Edition chronologique Tome I,club français du livre,1967

Victor Hugo :ŒUVRES COMPLETES,Bouquins,Robert Laffont,1985